

## 未来仏マイトレーヤについて

石橋 優子

マイトレーヤ (Maitreya, 弥勒) は一般に未来仏として知られているが、今はまだブッダ (Buddha, 仏・仏陀) になっておらず、菩薩 (bodhisattva) の身分である。しかしすでに菩薩としての修行も終え、残り一回の生のみでブッダになれる位に達しているため、菩薩が最後の生を過ぐす場所である兜率 (tustita) 天において菩薩のまま法を説いていることになっている。

このようなマイトレーヤ像は時代とともに徐々に作り上げられた形であり、様々な經典に表されるマイトレーヤ像は一樣ではない。初期の仏教經典では単に未来に現れるブッダとしてマイトレーヤの名が挙げられているにすぎないが、その後、釈迦牟尼 (Sakya-muni) 仏の「次に」現れることが強調されるようになる。また釈迦牟尼仏の弟子の一人を未来仏のマイトレーヤと結び付けるような記述も表れる。釈迦牟尼仏から予言を授けられたブッダでは、しかも釈迦牟尼仏の次に現れるということで、マイトレーヤはやがて釈迦牟尼仏の「後継者」としての役割を担うことになる。

また、この未来仏マイトレーヤに対する信仰は二つに分かれると言える。一つは「マイトレーヤがこの世に現れる時に自分もその場に居合わせたい」と願うものであり、もう一つは「自分がマイトレーヤのいる兜率天に生まれたい」と願うものである。この二つはなんら矛盾することなく併存し、日本にも両方の信仰が伝

わった。マイトレーヤがこの世に現れる時に生まれたいと願うものの、自分が兜率天に生まれマイトレーヤに会いたいと願うもの、いずれにしてもマイトレーヤは一時期非常に信仰された。今でも東南アジアの方では過去仏崇拜と併せてマイトレーヤも信奉されている。しかし全体としては、時代が移るにつれマイトレーヤへの信仰は衰えていく。この世に現れるマイトレーヤに対する信仰は中国などでは革命的な運動と結び付き、救世主の役目を担うこともあったが、それは一過性のものではなかった。また兜率天に在るマイトレーヤに対する信仰は、阿弥陀 (Amitayus, Amita-bha) 信仰に取って替わられた。

ところで「マイトレーヤがこの世に現れる時に生まれたい」という信仰の中心である「未来のこの世に現れるブッダ・マイトレーヤ」については、經典によって描写に変化が見られ、興味深い。

その最初期のものと思われる『チャッカヴァッティシーハナーダスッタント (Cakkavattisihanadasutta)』(『転輪聖王師子吼經』) では未来の世における人間の長寿と安楽・快適な生活が語られるのみであるが、マイトレーヤの出現についてより整理された形を成している『マイトレーヤ・ヴィヤーカラナ (Maitreya-vyākaraṇa)』や『弥勒下生成仏經』になると、単にその世界観を詳しく描写したと言うよりは理想世界の度合いを深化させており、非現実的な印象を与えるものになっている。『弥勒大成仏經』になるとその度合いはいっそう増し、その描写は阿弥陀仏などの仏国土を思わせるようなものになる。それでも、いずれの經典においても病の存在については一貫して言われている。マイトレーヤが出現する未来の世界は、人として一生を送るにはこの上なく

快適な世界であるが、それでも煩わしいものかあるということが主張されているようである。

一方、「自分がマイトレーヤのいる兜率天に生まれない」という信仰は、マイトレーヤが地上に現れるまでの非常に長い年月を待つより自分の方からマイトレーヤに会いに行こうという考えから生じている。兜率天については、『観弥勒菩薩上生兜率天経』（以下「上生経」と略す）によれば、前述の未来の世界以上に美しい世界であることがうかがわれ、こちらの描写も仏国土を思わせるものになっている。

「兜率天に在るマイトレーヤ」について述べた経典は、『上生経』の他には法華経が主なものとして挙げられるくらいで、「未来の世に現れるマイトレーヤ」について記されたものと比べるとあまり多くない。しかもこれらはブツダの名を称えたり経典を写することを功德になるとして勧めていることから、「兜率天に生まれてマイトレーヤに会う」という考え方は、マイトレーヤの物語の中でも後代に普及したものであると思われる。

このように考えると、やはり仏国土 (buddha-ksatra) という概念の影響は考えられ得ることであると思われる。仏国土は釈迦牟尼仏の他にも多くのブツダがいるという考えから出てきたものである。一つの世界に一人のブツダということから、そのブツダが主宰する世界のことを仏国土とした。阿弥陀仏の極楽などがそうであるが、『上生経』における兜率天の描写を見れば、兜率天がマイトレーヤの主宰する仏国土であると思なすことができる。

ただ兜率天自体は、仏教のものとこの世界観では欲界 (kāma-dhātu) の第四天に属しており、輪廻の中に組み込まれている。そのため、その住人である天人として生まれてもやはり寿命が

あり、死ねばまた別の世界に生まれることになる。また兜率天は次の生でブツダになることが決まっている菩薩が、菩薩としての最後の生を過ごす場所である。マイトレーヤのいる兜率天に生まれることを勧めている『上生経』においても、仏法に従って正しく修行した者は、その死後兜率天でマイトレーヤに会った後「マイトレーヤに従って人間の世界に降りる」と言われており、兜率天が最終の場所ではないことを明言している。兜率天に生まれることを勧めてはいても、この地上でマイトレーヤがブツダになるという基本的なところからは逸れていないのである。

以上のように、未来仏マイトレーヤの物語の形が整っていくのに伴って、その世界の描写はより詳細で華やかなものになっていくが、マイトレーヤが「釈迦牟尼仏の後にこの世に現れるブツダ」であるという基本的な性格は終始一貫している。それ故に、兜率天にしても未来の世界にしても、どれほどその理想化を進めても、厳密に言えば仏国土にはなり得ない。従って仏教での世界観が横に広がり、多くのブツダがそれぞれに仏国土を主宰しているという考えが主流になれば、マイトレーヤに対する信仰が廃れていくのは当然のことであつたと思われる。未来仏マイトレーヤは、ブツダという概念が変化していく過程での、過渡期にこそ必要とされたブツダであり、大乘仏教の隆盛とともにその意義を失っていったと思われる。